

弁護士 大阪弁護士会前会長
日本弁護士連合会前副会長

中 本 和 洋

剣道との出会い

私は昭和二一年生まれで、小学六年生の時から剣道を始め、三〇歳代まで続けてきた。その後、稽古は月数回から年数回に減っていき、現在ではほとんど竹刀を握っていない。弁護士になって次第に多忙になったということが理由である。一方、三〇歳代から二〇年間、関西学生剣道連盟の理事をし、年数回の審判をしてきた。現在は、同連盟の副会長を拝命しているが、平成二三年度は大阪弁護士会の会長職にあり、多忙でほとんどその任を果たす事ができなかった。

私の小学生時代の娯楽は、漫画雑誌であり、漫画の主人公の赤胴鈴之助に憧れて剣道場に通うようになったのが、剣道との出会いである。中学では、剣道部に入部したが、稽古がきついわりには鈴之助のように強くはなれず、あまり熱心に稽古をしなかった。私の実家は広島県の三原という町であるが、高校は三原から少し離れた福山市の進学校に進んだ。家から一時間半かけての通学は大変であったが、剣道部に入り熱心にやったので、だんだんとおもしろくなり、高校で初段、二段と続けて昇段した。

大学は、剣道が伝統的に強いことを先輩から聞かされていた京都大学を選んだ。昭和四〇年、運良く京都大学工学部に合格し、入学するとすぐに旧三高時代からの道場である養気館に行った。道場では、長身の外国人らしい人が剣道をしていた。鼻が高く、彫りの深い顔立ちで、長身であったため、外国人と映ったが、その人が、京大の斉藤正利師範であった。当時、大阪府警の師範でもあり、剣道八段の、日本剣道界を代表する剣道家であった。私が大学時代唯一「先生」と素直に呼べる師であった。大学の四年間は、剣道に明け暮れた。工学部では、平日は五時まで講義が詰まっております、実験、実習と、さぼれない講義が多かったが、できる限り講義に出ず、夕方五時からの稽古に備えた。斉藤先生は、京都に住んでおられ、ほとんど毎日指導に来ていただいていた。毎日一度は先生にかかり稽古をお願いするのだが、息が上がって一分ともたない。いつも道場の壁際まで追い詰められておしまいとなる。

昭和四〇年入学組には、矢部欽治、吉岡正和、成瀬三喜男と、各々出身高校で主将を務めた選手が入部しており、七人のレギュラーに選ばれるために、切磋琢磨していた。その結果、大学四年生の時の団体戦の戦績は、国立七大学戦、

近畿国公立大会、京都大会はいずれも優勝し、関西大会では準優勝、全国大会では早稲田を破り、ベスト十六という成果をあげた。

私は、大学三年生の時から、上段をとるようになっており、四年生の時には、負けることが少なくなっていた。学生剣道の試合時間は、通常五分間であり、五分間で、相手の動きから相手の技量を見極め、攻めを工夫する。何百時間の稽古も、わずか五分間で結果が出る。いかに集中できるか、いかに相手の動きを注意深く観察できるか、いかに大胆に打ち込むことができるか、勝負は一瞬である。涙を流して悔しがり、喜び、大学時代の私の剣道は、クラブ活動というよりも、真に仕事であり、学生生活そのものであった。剣道の試合に明け暮れていた頃からすでに四〇年が過ぎた。斉藤先生は亡くなり、多くの尊敬する先輩や矢部君までもが逝った。しかし、私の中の、剣道に対する熱意と思いは、今も少しも変わらない。(剣道五段)